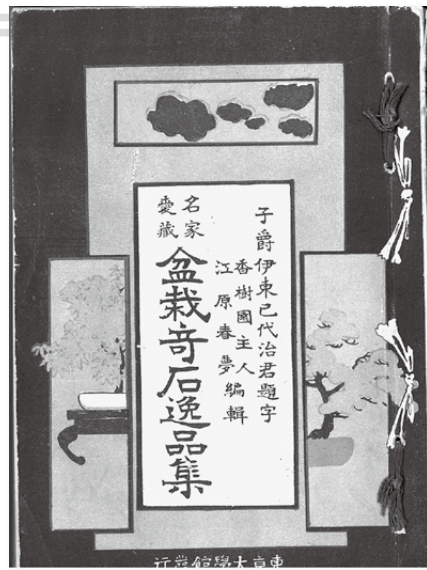


【収藏品紹介】  
香樹園主人・江原春夢編  
『名家愛蔵盆栽奇石逸品集』(東京大学館、明治42年)

本書は、明治36年8月に刊行された、村田利右衛門(香樹園2代目)と江原梅窓(春夢)の編集による同名の書籍の再版です。ただし、明治36年版の時は発行者が「香樹園」でしたが、本書では「東京大学館」となっており、また表紙のデザインや口絵に折り込みで挿入されていた香樹園のイラスト(「香樹園の全景」)のカットなど一部に変更点が見られます。今回は大宮盆栽美術館所蔵の明治42年版を用いて、その内容と特徴について



香樹園主人・江原春夢編『名家愛蔵盆栽奇石逸品集』(東京大学館、明治42年)

紹介します。

本書冒頭には、村田と「小宮刀水」の2人がそれぞれ序を書いています。このうち村田の序に本書刊行の目的が記されています。それによると、香樹園は当時、世間の盆栽家から「樹石」の「培養且つ配置の方法等」について「諮問」を受けることが多々あり、これに応えるため書籍の刊行を企画したと記されています。この背景には「近時盆栽の培養奇石の配置等に就て世に之れが方法を説ける冊子甚だ少なからず」といった問題認識があったようで、今回、「各名家」の「愛蔵の逸品」を集め、「各自多年の経験になれる培養及び配置の方法に就て其説」を聞いて編集を行ったとしています。

村田は本書について「机上の研究に成れる世間幾多の書朋と其撰を異にすれば」と述べており、「名家愛蔵」の盆栽・奇石を集め、その培養と配置の方法を記述する点に、本書の意義と特徴を見出しています。

本書以前に、例えば盆栽陳列会の記録(明治25年『美術盆栽図』)は出版されていますが、ここでは出品盆栽のイラストとともに樹種や盆器の名称は記されていない。樹齢や培養の方法などは解説されていません。一方で培養管理を解説した盆栽書籍では、樹種ごとや手入れ作業ごとの一般的な解説に留まっています。この点で本書は「名家愛蔵」の「逸品」の画像を掲載し、その一点一点に培養方法等の解説を付しており、構成と叙述は斬新です。書名に「逸品集」とありますが、確かに本書は「名家愛蔵」の盆栽・奇石の「逸品」を収録し、解説することに主眼を置いた「作品集」としての性格が指摘できると思います。盆栽書籍の新しいスタイルと言えるでしょう。

一方の「小宮刀水」の序では、「盆栽の妙は通例一尺五、六寸以内の盆裡に一場の天然を形成するに在り」といった盆栽論が展開されており、特に興味深いのは「余は盆栽は全く絵画と巧妙を争ひ優に美術の一種たりと断言する者なり」と、まさに「断言」している点です。これは絵画などを引き合いにして盆栽を「美術」と捉える早い時期の言説として注目されます。また、盆栽の「骨子要素」と

して「第一根張り、第二幹通り、第三枝配り、第四時代」を指摘してそれぞれの要点を解説している点も注目に値します。この「骨子要素」は、この時期の盆栽論としては具体性があり、かつ現在にも通じているという意味で重要です。小宮は盆栽に精通した人物であったと思われるますが、残念ながら詳細はわかりず、その人物像の探求は今後の課題です。

さて、内容については「名家愛蔵」の盆栽・奇石の「逸品」を1頁1点ずつ画像掲載し、その後に解説が付される形式で、計43点が紹介されています(その他に盆栽陳列の席飾りの画像あり)。この解説では、まず樹形・樹齢・寸法と盆器について説明され、次に所蔵者の入手経緯(来歴)、さらに「手入れ法」・「培養法」(芽摘み、植え替え、肥料、置き場等)

と続いていきます。解説もほぼ1頁1点ずつのため量的には少ないのですが、樹齢や入手経緯に関する説明には貴重な情報が掲載されています。

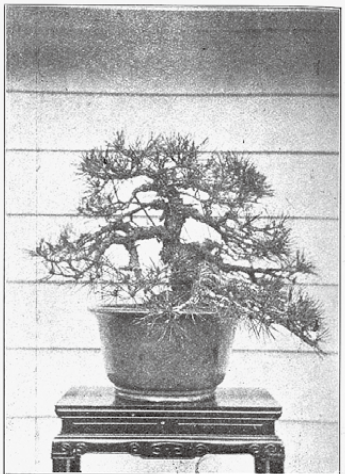
例えば、大隈重信の「紅葉鳶」(樹齢50年程)では、大隈がこれを手手したのが「明治廿七年の頃にして此当時は鳶の盆栽は都下に於ては未だ一品も見ざる処なり、近來鳶の盆栽が大に流行しつゝあるは、伯(大隈 ※筆者註)の鳶に依りて始めて之れが風潮を呈したるものなれば、伯の鳶は盆栽鳶の宗祖と称するも敢て誇言にあらざるを信ず」と記されており、「鳶の盆栽」の歴史を調べる上でも貴重な内容です。ちなみに、本書掲載の「名家」の中でも大隈は自身と夫人を合わせ、最多の計4点の盆栽が収録されており、香樹園とは非常に近い関係であっ

たことが窺えます。いずれも大隈から聞き書きされた解説が付されており、本書は大隈の盆栽家としての一面を伝えてくれる貴重な資料でもあります。

また、培養に関する説明では、「其配置の場所は平常中陰の架にして、肥料は寒中一回及び発芽前後より四、五回、人糞の腐熟せるものを稀薄となして与ふる由なり」(大隈「紅葉鳶」)とあるように、あくまで所蔵者がその盆栽に対して実際に行っている方法を紹介している点に特徴があります。もっとも、本書に掲載されている「名家」は、実業家や政治家など政財界の人物が多く、その大半は、当時本所横網町に六百坪の園を構え、隆盛を極めていた香樹園と関係を有していたと思われることから、実際の管理は同園が行っていたものもあるかもしれません。しかし、教科書的な樹種一般の説明ではなく、個別具体的な「逸品」を通しての経験的な説明である点で、やはり「机上の研究」とは一線を画す内容と評価できます。初版本は香樹園自身が発行者となっており、盆栽園の出版した書籍としても、本書の画期性が指摘できると思います。



大隈重信の「紅葉鳶」



大隈重信の「巖石松」